

木に親しむまちづくり推進委員会

県外研修先 / 長野県

期間 令和2年10月9日(金) ~ 10日(土)

今回は「木に親しむまちづくり塾」の活動として県外研修を行いました。1日目は、著名な建築を視察しながら北沢建築を目指し、2日目はハヶ岳の秘密基地を目指しました。

■神長官守矢史料館

設計: 藤森照信

所在地: 茅野市宮川389-1

守矢史料館は平成3年に開館し、建物の基本設計は藤森照信(建築史家)(当時東京大学生産技術研究所助教授・現東京大学名誉教授)の建築家としての最初の作品で、諏訪の建造物の特徴や中世の信仰のイメージを取り入れつつ、新たな発想の史料館を建築しました。

諏訪大社上社の神官である守矢家に伝わる文書を保管・公開する建物で、守矢家の敷地内に建っており、バスから降りて、民家の門をくぐると右手に建物が現れた。周囲の民家や土蔵に合わせたスケールに加え、RC造ではあるが軒や内部の化粧の木梁を見せることで木造っぽく仕上げている。屋根には鉄平石を敷き、同じものが周囲の側溝の蓋や踏み石にも使われていた。また建物のまわりは50~60cmほどの「オカメザサ」で覆われており、周囲になじませること(自然を生かす藤森建築)にかなり気を使っているのだろうと感じた。近くには他にも藤森氏設計の3つの茶室(「空飛び泥舟」「低過庵」「高過庵」)が点在しており、入り口を探して回るだけでも楽しい建物だった。



ハヶ岳の秘密基地(右手前が安井氏)



入口と四本の柱(イチイの樹木)



茶室「空飛び泥舟」



茶室「低過庵」



茶室「高過庵」

■諏訪大社上社本宮

所在地：諏訪市中洲宮山1

日本最古の神社の一つとされています。本殿を持たない諏訪造りという独特の様式。徳川家康が造営寄進したという四脚門など貴重な建造物が多く残っています。

ご神体は守屋山と言われているが、明確ではないらしい。参道は山の方へ続いているが、境内から「弓」型に参道が曲がっており、拝殿は山の方へは向いていない。拝殿の前面には石畳の広い間があり、参拝者からかなり離れた位置に建っていて、参拝するとき不思議な感じがした。地図で見ると拝殿はなんとなく東を背にして西向きに建っているようであった。出雲大社の本殿のご神体が西を向いているというが、関係があるのだろうか。



一の御柱と塀重門



境内配置図

■北沢建築工場

意匠設計：三澤文子+北沢建築設計部

構造設計：稲山正弘

所在地：上伊那郡箕輪町中箕輪沢1738

地域工務店の加工場と事務室として、2009年に竣工。当日は北沢建築代表取締役の北沢宗則氏に案内して頂き、計画の経緯から建物の細部に至るまで詳細に話を伺った。

工場の要件は、長野県産の杉材を使用し、フォークリフトで6m材の木材を振り回すことができる18m×24mの作業空間を実現すること。計画を始めた当初は当然鉄骨で建てる予定だったものの、稲山氏と話す中で、木造でできるという冗談のような助言をきっかけとして木造での計画を考えるようになったという。

北沢氏が流通材でできる構造で計画するという前提条件を提案し、それに答える形で稲山氏が模型を持ってきた。

その際には流通材であるが故に「面積から即座に概算の目安をつけられたため、やってみようと思った」という。

構造計算は許容応力度計算しているが、延床面積499㎡と500㎡未満のため4号物件に該当し壁量計算で申請したもので、許容応力度計算で提出すると適判が必要になり、実現できなかったとのこと。



左が事務室 右が工場



事務室兼展示室にある模型

屋根の鉛直荷重をアーチ状に伝達する樹状トラス構造



工場内入口庇



右側



工場の奥

屋根の架構にもかなり目を引くが、桁面の壁には303mm間隔で間柱のように120×120の角材が傾斜して並んでおり、それがすべて構造上の柱というのが衝撃だった。よく探すと数本おきに柱脚金物が付いていて、普通の材料と金物で独創的な空間を実現していることがよく分かった。

天井の方立ルーバーの加工は社員大工10人程度が手刻みで行ったという。特殊な工法ではないが、形状が複雑な為、型を作って合わせるよう工夫して施工している。方立ルーバーはロフト部分から上に上がることができるキャットウォークとしても機能しており、周到に考えられている。

隣接して三澤文子氏設計の北沢建築の事務所が建っている。事務所は加工場より以前に建てたが、加工場の建設を見据えて、あらかじめ敷地の隅に建てたという。

加工場も事務所も木造で建っているのも、両方のスケールが違うものの、違和感なく敷地になじんでいると感じたのは、事務所を建ててから植えたという前面の株立ちのケヤキもそう感じた理由かもしれない。

全体的に将来を見据えて計画していたことに加えて、周囲の人を巻き込んで計画するやり方が良い空間に結びついていると感じた。

また、施主でも施工者でもあり、設計にも深く関与している北澤氏の話しぶりから三澤氏、稲山氏の意見を尊重していることが感じられ、北澤氏の人となりにも学ぶところが大きかった。

文／(株)五井建築研究所 山本純平



キャットウォーク



金具接合部

■八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）

設計者：村野藤吾

所在地：長野県諏訪郡原村

山脈や連峰を想わせる、連続半円ドーム型の外観デザインは、敷地周辺が原産地である黒曜石の岩場がモチーフとなっています。

八ヶ岳の森林に調和した外観であるが、防水改修により建設当時の白ではなくグレーの屋根になっていたことは残念に感じた。

当館建設の際、村野藤吾は周囲の豊かな自然環境を損なうことのないよう、自然環境の保全にも配慮し、館外の彫刻散策路、中庭では彫刻作品を四季折々の山野草の中で楽しむことができます。この散策路の計画は現地を訪れ、その場で決めたとのことで、敷地特性を読み解き、その地での最良の選択をし、その地でしか実現しない建物の創造をするという熱量を感じる作品です。

内部空間は、特殊な形状の建物である為、多少の違和感を覚えたが、展示室に入った瞬間の空間の広がりを目の当たりにして納得した。

屋根形状に合わせた広がりある展示室の天井のレースカーテンが吊され、天井越しに柔らかく照らす照明は自然の木漏れ日を思わせる。

展示室での感動を誘発するための、エントランスの簡素感、平時より建物を設計する際、メリハリを意識するよう心がけている私にとってはお手本のような建物でした。

縄文時代中期にはこの地に日本の人口の28%の縄文人が生活していたとのことで、展示している縄文土器から読み解く当時の縄文人の思想について等、スケールの大きい話を小泉館長から伺い、普段小さなことに右往左往している自分の設計姿勢を見つめ直す良い機会となった。



建設当時の上空写真



現在の外観



展示室の奥に見るエントランス



展示室

■八ヶ岳高原音楽堂

設計：吉村順三

所在地：長野県南佐久郡南牧村

標高1500m、八ヶ岳連峰の南東斜面に建つ音楽堂で、六角形の組み合わせにより構成され、周囲の豊かな景観の中に、自然に存在しているような佇まいの建物です。

屋根のどっしりとした大きさと、軒先の低さ、このバランスが「自然に存在しているよう」な印象を決定付けているように感じた。

庇下には六角形の柱が並び、建物形状も柱形状も六角形であり床仕上げはタイルという、設計者からすると恐怖の納まりであるが、驚いたことにタイル目地はすべて例外なくきれいに通っています。

よく見ると目地幅の調整に加え、場所によりタイル寸法も若干調整されており、細部における設計者のプライドを見たように感じた。

現在では規格の製品が開発され短工期での大量生産が実現しているが、その反面設計における自由度については縛りが強くなっていると感じた。

ホール内は壁、天井ともカラマツを使用し、木に包まれるような印象を受け、天井には大きなトップライトを設け、自然光が明るく注ぐ。建物内のメイン空間の上部に大胆にトップライトを設けることは漏水のリスクから敬遠されてしまうことも多いが、この空間においてはそのリスクを大きく上回る付加価値を与えている。

ステージバックは大開口から周囲の景観を望むことができる。前述の自然光の取り込みみ然り、周辺環境からの恩恵を遮ることなく取り込んでいる。

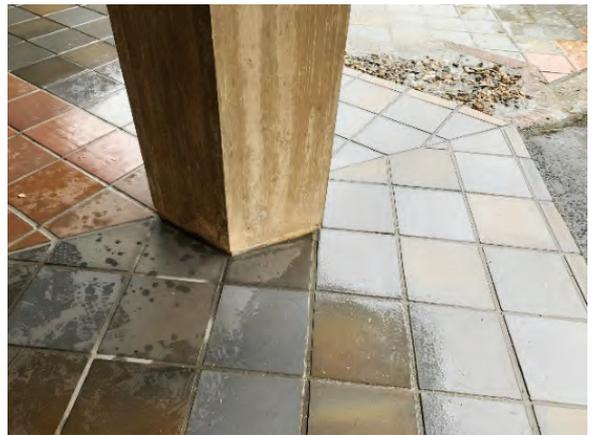
240席ある椅子はイベントに合わせて移動できるよう当音楽堂用に吉村氏がデザインし、また、ホール上部の大型照明もデザインされており、細部までこだわり抜いたことが、非日常空間の創造を実現しているのだと強く感じる事ができた。



周辺環境に調和する外観



庇下の六角形列柱



外部床のタイル割



トップライトから光が差し込むホール



ホール内観

■八ヶ岳の秘密基地

設計：桜設計集団

所在地：長野県諏訪郡富士見町

月、火、水、木、金、土、日。

桜設計集団が掲げる、建築にとって大事なキーワードである。

月：月明りを楽しむ

火：火をうまくコントロールする

水：水を積極的に貯める

木：木の良いところと良くないところを知る

金：銅、アルミ、鉄など金属の長所を活かす

土：土を建物に活用する

日：太陽を利用する

「八ヶ岳の秘密基地」はこの設計キーワードを72㎡の面積に凝縮した建物である。

平面寸法は6m×6mの正方形で構成されているが、これは桜設計集団の安井昇代表が胡桃山荘（設計：Ms建築設計事務所 施工：北沢建築）を訪れた際、そのスケール感に感銘を受け、この寸法の中でやりたいものを作りたいと思ったことがきっかけとなったとのこと。

建物を作る際は時間に追われ、時間による制限から、やりたいことができないことが多い為「時間による縛りを無くす」ということをテーマとしている。

使用する木材は2、3年しっかり時間をかけて自然乾燥し外壁に使用した焼杉は、早稲田大学の学生と一緒に自身で焼いたもので、建設には約2年を費やしている。

階高を落とす提案は実務でも行っているが、中々施主の理解を得ることが難しいため、本建物では実験的に階高を2,250mmに設定し、仕上げ等の工夫により低さを感じさせない設えとされている。

壁は防火設計のスペシャリストである安井氏ならではの設計で木摺り下地に瀬戸漆喰仕上げとなっている。

この秘密基地では天災によりライフラインが途絶えても3日間は自立して生活できる仕組みが確立されており、電力会社からの契約電力は使用せず、建物正面の傾斜地に設置した太陽光パネルで発電し、鉛蓄電池で蓄電する自家発電装置が設置されており、ドライヤーやヒーターなど多くの電力を使用する機器は置かず、冷蔵庫もタイマーで止まるようにしている。また、空調は無く、冬は薪ストーブで暖を取り、給湯は太陽熱温水器による。自家発電システムと太陽熱温水器は建築家・大塚尚幹氏が主宰する「自エネ組」による。安井氏のチャレンジ精神に感銘を受けた大塚氏が協力オフィサーを受け入れ実現したもので、公共エネルギーを全く使用しない建物という大きな挑戦であったが、今後一般の住宅



外観(建物入口)



外観裏側



縁側からの眺望



外壁の焼杉は部分的に表面を削って使用

にも導入できる手ごたえを感じているそうです。

建て方は長年付き合いのある「鯨組」が手掛けており、大型車両が入っていけない計画敷地までの材料搬入は2t車でピストン輸送したとのこと。

安井氏曰く「一つの建物を作るにはたくさんの人々がたくさんの時間をかけ、たくさんの知恵や技術を持ち寄る必要があり、その貴重な時間や技術をみんなで分かち合いよいものを残していきたい。」

お互いをよく知る仕事仲間と、たっぷり時間をかけて、これまでの経験、技術、挑戦を凝縮した、まさに集大成と呼ぶにふさわしい機密基地（～木材の活用法・性能を見て触れて学ぶ場～）での時間は、同じ建築に携わる者として理想の空間に触れる貴重な体験となりました。

大変な時世のなか、役員の方々に周到に準備して頂き、また、快く視察を受け入れていただいた方々のおかげで大変充実した2日間を過ごすことができました。関係者の皆様に大変感謝致します。

文／(株)山岸建築設計事務所 西田浩之



瀬戸漆喰による壁、天井仕上げ



建物正面に設置した太陽光パネル



研修風景

石川県建築士事務所協会会報

2020・12月号 Harmony 令和2年12月発行
発行者／(一社)石川県建築士事務所協会 編集者／広報・渉外委員会
TEL(076)244-5152 FAX(076)244-8472

〒921-8036 金沢市弥生2丁目1番23号(石川県建設総合センター5階)
E-mail:ishikyokai@ishi-kjk.or.jp URL:http://www.ishi-kjk.com